

『engage3 番外編 LOOSER』

著: ふゆの仁子

ill: 水名瀬雅良

溝口が高円寺の家に帰り着いたのは、明け方近かった。しかし玄関の電気は点いて、部屋も明るかった。鍵を開けると、まるで主人の帰りを待っていた犬のように、勢いよく潮が走り出てくる。

想像していたとおりの展開に、溝口は破顔する。

「ずっと電話してたのに、捕まらなかった」

だが開いた口から零れ落ちた言葉は予想していなかった。不(ふ)貞(て)腐(くさ)れた潮の表情に、溝口は肩を竦める。

「悪い。ずっと忙しくて、身動き取れなかったんだ。おまけに携帯はずっと会社のロッカーの中です」

無造作に靴を脱ぎ捨て玄関へ上がる。そのあとを潮は追いかける。

「今日、試写会だったんだ」

「知ってる」

溝口はあまり機嫌がよくないようだ。疲労の色も濃く、目の下にはくっきりとしたクマができていた。

「本当は俺も行くつもりだったんだが。仕事でそういうわけにはいかなかった」

カメラ一式が入った大きな荷物を台所で下ろすと、椅子にどさりと腰を下ろす。テーブルに両肘をつき顔を手で覆う。つけ足しのように大きなため息が、髭に覆われた口から零れる。

「溝口さん……」

大きな肩がやけに小さく見える。崩れ落ちたようなその様子に、声をかけるのを躊躇ってしまう。

潮は身を潜め溝口の後ろに立つ。

「溝口さん」

名前を呼んで、広い肩に手を置く。

「なんだ？」

顔をこちらに向ける前に、潮は溝口の身体を自分に引き寄せた。溝口が座っているのも、いつもと立場が逆転している。

「潮……」

「しばらくこのままでいようよ」

目の下に溝口の頭がある。目を閉じ、頬をそこに当てる。母親が子どもを腕の中に抱くように、優しく背中を撫でた。

溝口には助けられていた。自分が抱いたところで溝口にしてみればなんの救いにもならないかもしれない。それでも、強く抱き締める。

溝口は潮の意図を理解し、座ったまま潮の胸に自分の体重を預けてきた。

「何があったんですか？」

潮は小声で尋ねる。

溝口がこんな風になるのは、永見に関する以外あり得ない。そして永見に何かがあるとするなら、伊関に何かがあったのだろう。

「今は……言えない」

そう答えると、潮を振り返った。薄い笑いは、嘘の笑いだ。

「話せるときがくるかもしれない。でも今は勘弁してくれ。とても人に話せる状況じゃない」

それでも、溝口は何かがあったことだけは認めている。口を割らないだろう。

「この間、来生さんから電話があったんです」

だから、これは最後の切り札だ。

真っ直ぐ顔を上げて告げると、溝口の眉がぴくりと動いた。

「いつの話だ」

溝口の声色が変わる。

「一八日の深夜」

「何を言っていた？」

凄みを利かせた声に怯えながらも、潮はあのとときの電話の内容を告げる。来生の様子に恐れを感じたことも、忘れずに伝えた。

テーブルの上に置かれた溝口の拳が震えるのを潮が目にした次の瞬間、立ち上がり潮の胸倉を掴んできた。

「どうしてそれを早く言わない！」

首を服に圧迫される。

「なんらかの手を打てたかもしれないのっ！」

明らかに怒りを示した瞳に見つめられ、潮は言葉を失う。潮とて、何もしなかったわけではない。来生の異変に気づいたから溝口に連絡を取ろうとしたのだ。

「それは……」

「まさか、あいつとまだ繋がっているわけじゃないだろうな？」

激しい後悔の気持ちが広がりかけていた潮は、溝口の口から発せられた信じられない言葉に息を呑む。

「俺に近づいて永見の様子を探って、あいつにそれを連絡していた……」

溝口は、最後まで言葉を発することができなかった。頬を殴られる鈍い音がして、唇の端が切れ血が吹き飛ぶ。

胸倉を掴まれて動きを制止されていた潮だったが、瞬間の怒りに我を忘れ、ありったけの力を振り絞って溝口の頬を右の拳で殴ったのだ。

「潮……」

「どうしてそんなこと、言えるんだよ！」

潮は胸の前で握った拳をわなわなと震わせ、溢れそうな涙を堪えていた。

「来生さんから電話がきたとき、俺だって怖くてなんとかしたくて、何度も何度もあんたに電話したんだ！」

身動きできなくなるぐらいの恐れを覚え、助けを求めて何度も電話をかけた。それなのに、溝口は出なかった。出てくれなかった。助けてほしかったのに。

「あ……」

不精者の溝口は、携帯電話を持ち歩いていなかった。

「俺にはあんただけが頼みの綱だった。永見さんや伊関さんが、来生さんのせいでひ

どい目に遭う可能性を少しでもなくしたかった。これ以上、来生さんを悪者にしたくなくて、あの人を傷つけたくなくて、電話したんだ。それなのにつ！」

潮には、他に相談できる人間がいない。いくらワタセエージェンシーに入ったからとはいえ、吉田や他のスタッフとなんでも話せる関係にはなっていない。

潮にとって溝口は、唯一心を許せる相手だった。好きだ、愛しているという恋愛感情の前に、絶対的な信頼を置いていたのだ。

鳥の雛が生まれて初めて目にした動くものを親だと思うように、潮の意識下で溝口の存在は確固たるものとしてインプリンティングされていたのだ。

だがその信頼を裏切る言葉が、発せられてしまった。

「俺は確かに来生さんと暮らしていた。電話があったときに、確かにあの人に罪を重ねてほしくないと思った。だからって、どうしてあの人とまだ繋がっているって発想になるんだよっ！」

絶対的な信頼を勝ち得ているとは思っていない。それでも、こんな風に疑われるとは思ってもいなかった。情けなかった。

「潮……」

溝口は、自分の浅はかな発言をものすごく後悔した。だが遅かった。

触れようと伸ばした手はそのまま叩かれ、潮に睨まれた。

「俺は……救(たす)けてほしかった……のに、それを……」

悪かったと謝れば済むのか。溝口が言葉を探していると、潮は唇を強く噛み締めたまま自分の荷物を手に取って、玄関へ向かった。

「潮！」

慌てて追いかけても、振り返ろうとはしない。

肩を掴んだ手は満身の力でもって振り払われ、潮は裸足のまま家を飛び出した。

本文 p176～178 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>